

---

BOX

あり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

BOX

### 【Nコード】

N4960D

### 【作者名】

あり

### 【あらすじ】

砦山高校に入学したばかりの片屋真治はちょっとした出来心で女の子をつけて今は使われていない旧校舎に入ってしまった。そこでとんでもないトラブルに巻き込まれてしまい……

## 第一話：学園生活スタート

綺麗だ…………

そんな感想しか浮かばないほどに彼女は綺麗だった。俺の名前は片屋 真治昨日この砦山高校で入学式を終えたばかりのできたてホヤホヤの一年生だ。

俺は今とある女性をつけているおつと勘違いしてもらっては困るけつしてストーカーではないただ彼女が気になると俺の第六感が告げているのだ。

彼女をつけていると意外にも彼女が向かった場所は今は使われていないため誰も近づいていないと言われる旧校舎に向かっていたうちの学校は私立ということもあり敷地はかなりの広さだった。

初めて見たが近くで見るとまだそれなりに校舎として機能しそうな風貌を維持していた。彼女は立ち入り禁止区域である旧校舎になんのためらいもなく入っていった。

俺は彼女と違い少しためらったがやはり彼女が気になったので入っていた。

旧校舎の入り口に踏み込んだ時空気というか雰囲気というか何かが変わった気がした。

しかし旧校舎に入るとき少しためらったのが災いした入ったあとすぐに彼女を見失ってしまった。

「参ったな見失っちゃった」

その時後ろから不意に何かが飛び出してきた。

「グルルル…」

その動物は…いやこんな動物はどんな図鑑を見ても載っていないだろう。

「な…なんだこいつは」

まあ言葉では伝わりにくいと思うが体は大きさが大型犬の犬でいいのだが首から上が問題だ、なんとその首は途中で二つに別れ片方が

犬片方が猿というなんとも奇妙な形をしていた。  
明らかにそいつは俺を敵対視していた。

「グルルル…グワツ」

そいつはしばらく俺は睨んだ後急に鋭い牙をむき出しにして襲いかかってきた。「うわっ」

俺は間一髪で避けられたが右肩に浅い傷を負った。

「くそっ…これでもくらえ！」

俺はそこに落ちていたほうきで殴りかかった。

「ガウツ」

そのほうきを口で受け止めたあと簡単に噛み砕いた。命が危ないと感じた俺は走って逃げようと思ったが。万事休す少し先は行き止まりだった。

俺は目をつぶり念仏を唱えていた、その時

「カイトツ」

「分かった」

「キャーン」

急に誰かの声が聞こえたと思ったたら俺に飛びかかろうとした生き物の前に小さな犬に羽が生えたような小さな生き物がてをかざすとあの変な生き物は壁にぶつかったように弾かれた。

「カイトあのブラックの弱点属性は？」

「いま調べてる……分かったよ氷だ」

「氷だな」

そのカイトとかいう生き物に命令をだしているうちの制服をきた男はポケットから四角い箱と水色の球を2つ取り出した。

「運が悪いなお前氷は俺の得意分野だぜ」

男は取り出した箱の中に2つの球を入れた。

「水の宝玉2つを捧げる」そういうとその男は箱をにあのブラックと呼んでいる生き物に向けた。

「フリストツ」

そう言う箱の中から突然氷の柱が出てきてそのブラックが貫かれ

た。

「キャンッ」

その程度の断末魔をあげる位しか力が残って無かったのか全くそれから動かなくなった。

「ふうっ終わったか君大丈夫かい？」

この出来事が俺の高校生活を大きく狂わせるとはこの時は考える余裕は無かった

「君大丈夫かい」

そう言われてさしのべられた手を俺は素直に握り返した

「え〜と…」

俺はたくさん聞きたいことがあったので何から聞こうか戸惑っていた。

「頭が混乱しているようだなまあまずは自己紹介からだな俺は三年の神田 樹だこいつはホワイトのライトだ」

「よろしく！」

「君の名前を覚えてくれるかな」

「あ、はい俺の名前は片屋 真治ですええっとなんかよく分からないけど危ないところをありがとうございました神田先輩」

「いや今回の事件は俺達生徒会側の落ち度だまさか査定漏れした生徒がいるとはこんなことは前代未聞だ」「ホントホント生徒会始まって以来の不祥事だよこれは」

「はあ…」

俺は何の話をしているのかよく分からなかった。

「まあ、とりあえず君には話さなければいけないことがたくさんあるまずは、君の怪我をなんとかしなければな」

そう言えば肩の怪我をすっかり忘れていた。

「先輩はかどってますか」急に後ろから話し声聞こえてきた。

「あら、君は誰？一年生の生徒会で君を見た覚えが無いんだけど」

「ああ、彼については生徒会室で話すそれよりちようど良かったちよつと彼の傷を治してやってくれないか」

「ふーん分かりましたネミアよろしく」

「はい」

見ると知らない女性の肩にも猫のような小さな生き物が浮いていた。  
「ちよつとの間動かないでね」

言われた通りにしているとなんと肩の傷がどんどん塞がっていった。

「うつつわ傷が」

「ふふすごいでしょ」

その猫のような生き物が得意そうな顔をしていた。「まあ、とりあ  
えずこれでいいな片屋くん一緒に生徒会室に来てもらえるかい？」

「へ、わ、分かりました」「気にしないでいい別に反省文を書かせ  
ようとかそういう訳ではないでは行こうか」

神田先輩は生徒会に移動している途中の道で

「ああ、紹介が遅れたな彼女は二年生の中宮 加奈枝だ中宮彼は一  
年の片屋 真治だ」

「ふふ、よろしく片屋くんあ、そうそうこの子はネミア仲良くして  
あげて」

「ネミアだよ、よろしく」「片屋です」

俺はなかなか頭が整理出来なかったこれからどのようなことを話さ  
れるのか考える余裕もないほどに…

## 第一話：学園生活スタート（後書き）

初投稿です、楽しんで読んでもらえれば幸いです。

## 第二話：破天荒設定

「……！まさか、そんな事例いままで聞いたことないですよ」

中宮先輩は信じられないというような顔をしていた。「確かに信じられないのは分かるが現にこうして彼は力を持っていないのにあの旧校舎に入ることができたこれはまぎれもない真実だ」

俺はやはり話の意味が理解できなかった。

「ええつとそろそろ俺にも分かるように話をしてもらえませんか？」

「ああ、すまないそろそろ話を始めよう。まず君はこの学校の生徒会がどのような基準で選ばれているか知っているかい？」

「え」と……確か中学時代の成績などで決まり三年間生徒会を委員会活動として続けるだったような気が」

「その通りだししかし実際は中学時代の成績なんかまったく関係無いんだ」

「へ、……そうなんですか」「ああ君も見ただろう俺が四角い箱と球を出して何かしているところを」

「ああ、あの……変な」

「そうあの力などを使い旧校舎に現れるブラックと呼ばれる魔物を倒すことが我が砦山高校生徒会の使命だしかし力を使える者は限られているその力を使える者のことをウィザードというのだが入学試験の時にウィザードの適合試験もわからないように行われているそして適合試験に合格したものがうちの学校に入学するときにはうちの生徒会に入ってもらうのだしかし君は適合試験に受からなかったにも関わらずあのウィザード以外は入れないはずの旧校舎に入っている」

「え」とそんな一氣にいわれても何がなんだか」

俺の頭はもうパンク寸前だった。

「ああ、すまんな昔から説明は苦手なんだ」

「まず、何であの旧校舎にあんな訳のわからないそのブラックとか



「いうやつが現れるんです？」

「そうだなそこは、話せば長くなるから次の機会に話すとしてようまず君には他の人たちと同じようにBOXとホワイトを持たなければな」

「どうやらすでに俺は生徒会入りが決定しているらしい「まず、君にはホワイトというこのカイトのような生き物を生み出してもらう」

「はあー、あのどうすれば」

「君にもウィザードの力があるのはもう立証されているならば右手を出してクライツと唱えれば生まれるはずだ」

俺は言われた通り右手を前に出して唱えた。

「クライツッ」

すると右手の掌が光気付いたら一匹の小さな竜が俺の掌の上に浮いていた。

「……！！竜のホワイトだと聞いたことないぞそんなの。」

「いえ、先例が一つだけあるわ前代校長……」

「なるほどだからこそ君は査定から漏れたのかもなさあ片屋そのホワイトに名前を聞くんだ」

「名前を教えてくださいるか？」

「……ソルト」

その竜はゆっくりと答えた「君には驚かされてばかりだな査定漏れた次は竜のホワイトを産み出すとは」神田先輩は本当に驚いたようだった。

「ホント面白い後輩さん」俺はソルトと名乗る竜に話しかけてみた。

「よろしくなえ」とソルト

「君が僕のパートナーなの？」

「あ……ああ、そうだよろしくな！」

「うん、よろしく……名前は？」

「片屋真治だ

まあよく分かんが長い付き合いになりそうだから真治でいいよ」

「……そうかよろしく真治」「なかなか素直なホワイトじゃないかソルトくん君のタイプは？」

「：ソルトでいい、攻撃型、属性は火」

「攻撃型かちょうど良かったでは片屋くんには次の話をするとしてよ  
うあの旧校舎についてたが」

「あ、そうそうあの校舎は一体なんなんですか？」

「やつと一番の疑問が解けそうだった。」

「片屋、君はあの校舎に入るときなにか変な感じがしなかったかい？」

俺は旧校舎に入るときに感じた変な感覚を思い出した「あ、確かに  
なんか変な感覚がありました」

「あの旧校舎は現実とは世界が違うんだいうなれば電腦世界という  
やつだ。」

「電腦世界つまりあの中はインターネットみたいなものなんですか  
？」

そんなSFの世界のような話があるのか。

「まあ実際に存在するのだから信じてくれそれであるのブラックはバ  
グのようなものだ」

「あいつらをほっとくとうなるんですか？」

「あいつらは消していかないと電腦世界がどんどん広がりこの現実  
の世界が電腦世界になりブラックがのさばる世界になってしまう」

「なるほどそんな理由が」「まあそれを見回るチームは学年でわけ  
て三人一組なんだがバランスの良さ的には攻撃方法に富んだ攻撃型  
攻撃型を後ろから守る守備・回復型現実世界から電腦世界全体の情  
報を送る情報型このチームが一番好ましいのだがちょうど一年に攻  
撃型がいなかったんだ。」

「すいませーん遅れました」

「ああ、君たちちょうど良かった君たちのチームに入ることになっ  
た片屋真治くんだ」

そこにはオレンジ色の長い髪のことショートヘアーの白い髪でメガ  
ネをかけた子の二人の女の子が入ってきた白い髪の女の子はノート  
パソコンを持っている。

するとオレンジ色の髪をした女の子が駆け寄ってきた「え、てことは私達のチームもやっとな活動できるんですね私、翡翠薫、よろしくね片屋くん」

「ああ、よろしく翡翠さん」

気付くと翡翠さんの横にもう一人の白い髪女の子がたっていた。

「…雪野小百合」

「ああ、よろしく（汗）」

だんだん俺の生徒会活動が現実味を帯びてきていた。

## 第二話：破天荒設定（後書き）

更新遅くてすいません。楽しんで読んでもらえたらうれしいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4960d/>

---

BOX

2010年10月14日15時02分発行